

シベリアの熊祭りの歌・寸劇・踊り(精霊) まれびと論を想う

星野 紘

1、西シベリアのオビ川流域のタイガ、ツンドラの大地

今から15年前の1998年の12月に西シベリアのオビ川中流域でハンティ人の熊祭りを見学した。それは、雪や氷で覆われたシベリアにだって中国やインドをはじめとしたアジアの国々で見受ける祭りの芸能(民俗芸能)と同様のものがないわけではないという思いに始まっていた。その2年前に手にしたロシアの出版物のカラー写真で、白樺の皮で作った簡便な仮面をかけてなにやら演じているのを見かけて、どうしてもその祭りの現場に行ってみたいものだと思った。縁あってそれが実現したのであったが、実際にその現場に立ち会って驚いたことには、そこはまさに芸能の宝庫であった。このことを知っている日本人はまづいないと思われるので、その豊かな芸能をここに報告したい。

15年ぶりに2013年5月と9月に、知己である現地の研究者のモルダノフ・チモフェイ・アレクセイビッチ(1998年当時、オブスカーウゴールスキー民族復興学術研究所研究員)と彼の奥さんのモルダノバ・タチアーナ・アレクサンドロブナ(現在、同上研究所研究員)達の案内で、ハンティ・マンシスク市とカズィム村を訪問し、聞き取り調査をした。タイガ、ツンドラの大地、そこに住むハンティ人のトナカイ放牧、森での狩猟、河川流域での漁労などの生活振りの一端に触れて、あらためて我々アジアの農耕地帯住民の生活や自然環境との違いを感じないわけにはいかなかった。もっともここでも、我々の所と同じグローバル化した世界の風景があった。当地方の天然ガスや石油資源を開発しているガスプロムというロシアの大企業が、森のど真ん中に町を建造したり、立派な舗装道路を敷設していたし、村役場の行政のトップと面会したら、少数民族の伝統文化資源をもとでになんとか観光客を呼び込みたいと言っていた。

9月に行った時は、我々の一行4人は、昔話班2人、熊祭り班1人、狩猟漁労習俗班1人の3班に分かれて調査をした。1人でトナカイの野営地への1泊2日

の小調査行を行った赤羽正春氏の報告を聞くと艱難辛苦を強いられたとのことだった。股の下までであるゴム長靴を着して目的地に向かったが、野営地に到着するまでの湿地帯は膝まで靴が地面に埋まり、片道3時間くらい、案内役のハンティ人の足跡をたどらねばならなかったという。大河オビの中流域一帯はその支流、沼、湖が散在する大湿地帯なのである。そのような湿地に吸い込まれて死したトナカイの白骨体に遭遇したという。タイガの森林地帯は獣、鳥類がきわめて豊富である。動物捕獲の仕掛け罠が博物館に野外展示してあったが、熊用、大鹿用、穴熊用、黒テン・リス用、川ウソ用等々大小何種類かのものが、各々に別用のカラクリ仕掛けが組み込まれて森の各所に設置してあった。漁業も盛んで、ヤナ(筌)も大小いろいろとあるようであったが、数メートルもある川カマスの釣り針は5、6センチもある大きいものだった。先述の通りここは河川、湖沼地帯なので、魚類は簡単に捕獲できて、最もた易すくありつける食料源であると見てとれた(つまり狩猟民なのだが、動物を捕獲してそれを得るよりかは)とは、赤羽氏の言であった。

2、豊富な熊祭りの芸能

1998年の熊祭りは、オビ川中流域から東の方へ支流カズィム川が流れているが、その分岐点に建造された町ベロヤルスクの空港からヘリコプターで、東の方に180キロ飛んだところのシュンユガンという雪原(野営地)で、4日間にわたって行われた。一番寒い季節の12月20日から23日までで、零下50度近いタイガの平原にチュムという天幕小屋2張りも建てて、野営地の小屋と合わせて3棟の建物の中に約60名のハンティ人が参集宿泊して執り行われたのだ。設備らしいものは何もない所で、ヘリコプターで人間と一緒に自家発電機、暖房用ストーブ、食料品その他、滞在期間中の全ての必需品を持ち運んで開催されたのだ。一番近い村はそこから30キロ離れた所にあるユーリスク村で、万一病人が出たりした場合のために、無線レシーバーが用意されていた。12月19日そこへ到着した日は、チュム建て作業や薪集めなど、その後の雪原での数日間の生活の場所作りがなされた。

その翌日から熊祭りが始まったが、日照時間が大変短く、朝は11時頃に太陽が昇り、3時頃には暗くなり始めた。オーロラの雲の走るのが見える夜もあつ

た。ともかく4日間のうちに合計95演目もの多数の歌、寸劇、踊り(精霊)がくり広げられた。それらの中から主だったものの概要を紹介したい。各演目の説明は、モルダノフ・チモフェイ・アレクセイビッチが特に私のためにロシア語で書いてくれた原稿が手元にあるので、それを日本語訳する。順次それらを芸能の種類別に分けて、まずその概要の解説を加え、そしてそれぞれの演目ごとの次第、内容を記すことにする。

その前に、総体的な、この折りの芸能に対する私の15年前の第一印象を記しておきたい。それは、日本の能や狂言に近いという感じのものであった(こんな遠隔地に日本の伝統芸能的なものが存在するなんて、まるで蜃気楼を見ているような思いであったが)。一つにはそれは精霊の登場する演目が多かったことによる。能では、里の女、あるいは所の者(男)などがいつのまにかスーッと現れいで、実はそれが今は亡き主人公の霊であって、その霊が後に生前の姿に変身してから再度登場し、恋や戦いなどの悲劇的な事件に遭遇し、心の葛藤にさいなまされる。それを見せるのである(能ではこの形式の演目を夢幻能と呼んでいる)。熊祭りの精霊の演目にはこの能の曲のような複雑なストーリー展開はないものの、能の曲の場合と同様に、現代人からすると見えにくくなった精霊が盛んに登場して活躍をする。しかも第4夜目の終末部に登場する精霊(霊位が高く神といえる)は、祈り手という精霊とは別の役の者が登場して、彼の呼び込みによって初めてくだんの精霊が登場して来る。つまり呼び込み寺、日本の能におけるワキ役そっくりの存在と思えたのだ。他方、95演目の半数近くは、演者が仮面(白樺の皮で作ったごく簡単なもの)をかけて登場し、滑稽なやりとりを演じるもので、こちらは日本の中世の狂言を彷彿とさせるものであった。

(1) 熊への対応と熊自身の歌

当該熊祭りにおいては、最初に、森で殺害され、頭と四肢ばかりの毛皮のぬいぐるみ状態となった熊が、人々によって野営地の小屋に運び入れられる次第から始まる。家の主はオノを手にして扉の所に立ち、その家への運び込みを拒絶する。それは熊が何か悪いことをするのではないかと怖れられたからである。しかしながら、それが4回繰り返された時に入室が許可される。その時人々は

熊に向かって雪を投げつけたりしてきよめる。

No.1 「熊の家の中への運び込み」

この家の主のピョートル・イワノビッチ・センゲポフ(熊の父親役となる)は、オノで熊の雪を払い落とすべく、森のお客さんを迎える準備をしている。

外で叫び声がある。二人の男が扉の方へ熊を運んでくる。家主はオノを手にして扉の傍に立ち、熊を家の中に入れさせない。「入るな、入るな」、と扉の上にオノで刻みを打つ。「おそらくそれ(熊)が我々に何かよくないことをしようとたくらんで、家に入れると言っているのだ」と言う。

祭りの参加者達も言う、「そうだ、当然だ、何かよくないことをしようというんだ、だから我々はこんなに沢山集まっているんだ」。

外で再び騒ぐ声、叫び声が聞こえる。ピョートル・イワノビッチ・センゲポフは再び扉の上にオノをかまえる。「入るな、入るな、我々は怖いんだ！」(4度目になって熊を家に入れた。このことから、これは靈魂を4つ持った雌熊だと解る。もし雄であれば5度目に熊を入れる)。

熊を家の中の隅に据え置き、それに飾り付けをする。家主は2人のオルトフ役(祭りの進行役)を熊にうかがいをたててから選ぶ。ロシア語でオルトフとは“給仕人”ということである。彼等は適宜祭壇の熊の前に新鮮な食べ物を供えなければならない。また彼等の任務としては祭りの次第進行を司り、演者の衣装を付けてやることだ。

祭壇に安置された熊はスカーフで覆われている。これは殺害された時からそうなのだが、熊は赤ん坊と見なされ、この家の主人がその父親役、彼の奥さんが母親役をつとめている。毎日熊祭りを始めるに先立って、熊のスカーフをめくり、目を覚ましなさいという歌を歌いかける。

No.2 「熊を目覚まさせる歌」

歌い手は熊に向かって歌う。

(歌の文句) “あんたが森で生活していた時にはいつも早起きしていたが、今はいつまでも高枕をしているね、ごらん沢山の雌黒テン、沢山の雌黒テンが集まっているよ。森の獣よ目を覚ましなさい、目を覚ますんだ！あんたの妹のケードル(西洋杉)はとっくに起きていますよ、とっくに目を覚ましていますよ、森の獣よ目を覚ましなさい、目を覚ますんだ！あんたの妹のウサギはとっくに目を覚

まして、野バラに沿ったキノコのある所を、低木のキノコの所を走りまわっているよ、獣よ目を覚ましなさい、目を覚ますんだ！あんたの妹のキツネはとっくに目を覚まして、沢山の湖を走りまわっているよ、獣よ目を覚ましなさい、目を覚ますんだ！お嬢さん獣よ目を覚ましなさい、目を覚ましなさい（“お嬢さん獣”とって熊に向かう）。あんたの兄弟のアナグマはとっくに目を覚ました、タイガの森をとっくに走りまわったよ。家にやって来たハンティ人達に向かって、目を覚ましなさい、目を覚ますんだ！”（この歌の後、雌熊を持ちあげて、目覚めさせ、熊にかぶせてあったスカーフを取りさる。熊を殺してから毎日これを歌いかける）。

そして、4日間ともその日に予定された演目を終えると、今度は次のような“熊さんお休みなさい！”といった趣旨の歌をうたいかける。

No.19 「夕べの歌あるいは熊を眠らせる歌」

（歌の文句）“あんたが森で生活していた時には早く横になって眠った。今はどうして眠らないの？あんたの妹のケードルは全てのことを終えて眠ったよ。あんたの妹のウサギはとっくに眠った、枝の多い木の所でぐっすり寝ている。獣よ聞きなさい、今まではしゃいでいた女の子達のいとおいしい家も静かになった（つまり熊祭りの第一日目が終わった）、腹に贅肉のついた男の子（太鼓腹）も沢山やって来たのだが、もう帰ってしまった。お嬢さん熊よ、横になって眠る夜がもうとっくにやって来たんだよ”（熊の頭をスカーフで覆ってやり、熊は眠りにつく）（この歌は毎夜歌われる）。

ここで順番を前にもどし、No.1の熊の目覚まし之歌が終わると、熊の歌（家に入れられた熊とそのほかの熊のも、熊自らが自分を叙す歌）が、毎日プログラムの最初の方で数番歌われる。ここではその中から3番だけを以下に紹介する。この種の熊の歌は3人、5人、7人の奇数の者が互いに小指を結びあって手を振りながら一緒に演ずるが、中央の者一人だけが声を出して熊に成りきって歌う。最初に、第1日目の1番目に歌われる熊の歌（No.4）を紹介するが、これは天界の主（創世神）トルムの息子（熊）が、天上から地上界に降りるといふ熊の誕生譚である。続いて当該熊祭りの対象となった熊の歌（No.5）、そしてウラル山脈の

傍(東側)の地で捕獲された熊の歌(No.32)を紹介する。

No.4、「熊が天から降りる神話の歌」(熊の歌)

熊は天の父親トルム(トルムはハンティ族の天上界の神である)の所に住んでいる。(歌の文句)“金色の風の水が流れている”トルムお父さんの所だ。たよりない脚をした小さな獣、たよりない手をした小さな獣。トルム父さんは毎日狩に出て行く。彼は一人で残る。父は彼が、(歌の文句)“黒テンの毛皮が敷きつめられた巣”から降りることを禁じている。息子は何も聞かない。彼が下へ降りると思いがけなくも天の路面が突き破れた。彼は下界を見て歌う。(歌の文句)“緑のラシャが敷きつめられた大地、黄色いラシャが敷きつめられた大地”。息子は下界へ降りることを願い出るが、父親は許さない。父は息子に、地上は天上から見るほどに良い所ではないと言う。息子は固執する。三度目ようやく父親は彼を降ろしてやることとした。父は息子のために鍛冶屋に鉄製のユリカゴを作らせて下界へ降ろしてやる。その前に父は地上でどう振舞うべきかについて忠告して言う。決してトナカイの群れに手をつけてはならない、倉庫を壊してはならないと。熊は同意する。しかし地上に降りると彼は寒さと飢えとブヨとに襲われ、父親の忠告をすっかり忘れてしまい、人に害を与え、建物、墓を壊してしまう。この時大地の母が現れ出て、父親が彼に戒めていたことを思い出させ、天上界の報復を予告する。すると犬の泣き声が聞こえ、熊の巣穴にハンティ人がやって来る。彼は死ぬ運命となっていて、もしハンティ人と出会えば、その者は熊を殺さねばならない、これがトルムの意志なのだ。

いくつか歌われた熊の歌のうち、1998年12月に行われた時に殺害された熊に対するものが次に紹介する歌である。ここに叙されているように、生まれ育ってから餌を求めて、森や川、湖沼の大地を駆け巡ったこの熊の生涯が語り語られている。この間、夏には蚊やアブに悩まされ、秋にはキイチゴや木の実で腹一杯となり、雪が降り出す頃には巣穴で冬眠する。こういった年月を何年か繰り返して後、この年の冬に猟師に捕えられて殺害され、そしてここに自分の熊祭りが執り行われるに至っている。そういう、いわばこの熊の一生が語られるのだ。熊の歌は一般にこんなふうな内容となっている。この歌の場合延々と6時間にわたってそれが歌い続けられた。この種の熊の歌を聞いていたハンティ

のご婦人が涙を浮かべている場面もあった。筆者は歌の文句が解らず、具体的にどういふことに対して彼女がそういうふうになったのか確かめられなかったが、歌舞伎の愁嘆場に涙する我々日本人に劣らないようなものがあるように思われた。現地の某研究者が解説してくれたが、熊の歌は地理の勉強となる有益なものであるとのこと。大地を駆け巡った熊しか知らない地理スポットがあって、それがこの種の歌を聞くことによって解るのだそうだ。少なくともそういった発見のある魅力を有した歌ということなのであろう。

No.5 「シュンユガンの熊の歌」(熊の歌)

熊が小川のキノコ沿いにやって来る。強い風が吹き始める。その後、風が和らぎ、蚊の黒雲が熊を襲い苦しめる。熊は開けたツンドラの方へ出て行く。キイチゴ(これには熊が舌鼓を打つ)が一面に生えている。熊はキイチゴを、(歌の文句)“集める”。(歌の文句)“背中に脂肪がつき、胸に脂肪がつく”。秋がやって来、熊は針葉樹林の方に向かう。コケモモの実が熟した。熊は、(歌の文句)“自分の満ち足りないクゾボク、満ち足りないナビシュカを一杯にする”(“クゾボク”“ナビシュカ”とは熊の胃袋の隠語である)。

北風が吹いて来た。熊はシュンユガン川(カズィム川の左側の支流)のたてがみ(鬣)状の地形となった所へ出て行く。小雪が降り出して地上を覆う。熊は場所を探して巣作りをする。冬になって犬の泣き声が聞こえる。テルムシルヨーフ氏族の男が巣穴の所へやって来る。慣例にしたがい熊の胴体を解体し、火を起して料理の準備をする。全ての精霊達が呼び集められる。そして熊を野営地に運ぶ。次の日、聖なる場所(全部で9か所)へ連れて行く。ユーリスクの古い村で夜を過ごす。重要な聖なる場所では、(歌の文句)“おばあさんのホレイ”(ホレイとはトナカイを御する長い棒のことである)と呼ばれる所だ。熊のために、カズィムの女神がやって来る時は、この場所にホレイを置くことについて歌われる。それは松の幹から生えた白樺である(このような樹木は実際に存在している)。ユーリスクの町の守護霊に、そして全ての精霊に祈りをささげ、生贄を供える儀礼を執り行う。参列者の年配の女性が次のように言う、“森のお嬢さん熊さんよ、あなたは家の中に据え置かれて踊りや歌が行われるでしょうよ”。それから熊はマルンクベリの野営地に運ばれて、家の中に入れられ、熊祭りが行われるが、その過程で熊の靈魂の一つが天に送られ、ほかはテルム・

シル・ヨーク氏族の人々の守護霊として残る。

No.32 「石の背中」(石の背中とはウラル山脈の傍の所)(熊の歌)

冬に熊は巢穴で眠る。彼は冬の間長いこと横たわっている。片方の耳から強い風が吹き始めたことが聞こえて来る。巢穴から出て行く。身を動かして脚のこり、しびれをほぐす。夏がやって来る。蚊が狂ったように襲って来る。熊はタイガを歩いて、それから森がたてがみ(鬣)状となった所へと行く。小川を横切ると、穀物置き場が見え、そこへ立ち寄る。そこはボグルカ川の傍で、ここにトルム(天上の神)の聖なる場所がある。穀物倉庫に座っていると、聞こえる、トナカイに乗った人々がやって来るのが。でも彼等は熊には手をつけない。それから熊は別の聖なる場所に行くが、そこはシェクリア川だ。再び穀物倉庫に座っていると、人々がやって来るが、やはり熊には手をつけない。熊はもうひとつの川を横切る。それはシニヤ川だ。聖なる場所を見つけ、穀物倉庫に座っていると、人々がやって来て熊を殺す。野営地に運んで行く。皆が集まり、家では熊祭りの準備が行われる。が、シェクリヤ川の男が病気になった。人々はシャマンを呼んだ。シャマンが言うには、熊はシェクリヤで殺してほしかったのだと言う。そこで皆は熊とともにその聖なる場所へ向かい、生贄を供える儀礼を執り行ってもどって来た。するとボグルカ川の男に同じようなことが起こった。熊がそこで殺されたかったことが解る。生贄を持ってその聖なる場所に行った。それが済んで、やっと熊祭りが始まった。熊は守護霊となった。

(2) 寸劇などの冗談演目

この種の冗談話の演目は、現代人にとっても十分に面白おかしく堪能できるものだ。その多くは仮面をかけて演ぜられる寸劇仕立てとなっているが、中には歌となっているものもある。登場人物の多くは人間であるが、精霊であったり獣や鳥などである場合もある。ほとんどがルンガルトゥブと呼称されている。その意味は、以下に紹介するこの種の5演目のうちのNo.40で説明してあるが、ペチョラという所(当該熊祭りはウラル山脈の東側のオビ川流域で行われているが、山脈の西側にペチョラ川が流れており、その流域の地)に住んでいる者達が山越えして遠征して来て演ずるものであり、この言葉は熊祭りの場に来てやる者達の芸という意味である(筆者註：日本の門付芸に相当するもの

ではないのか?)。この種の芸能が、4日間合計95演目のうちの半分近くを占めていたように、いかにも熊祭りの饗宴の賑わいを代表するものだ。この場では、いかに冗談が求められるものかを物語る話がある。実は熊祭りの開始に先立って占いが行われる。それは祭壇に据えられている熊のぬいぐるみを持ちあげて見て、それが重いか軽いかで占うのである。それが仮に重たかったとすると、この熊に当家の守護霊になってほしいという人々の願いが拒絶されたことを示す。そのような時の熊祭りでは、徹底的にエロチックな冗談演目をやるということである。笑いに笑って徹底的に騒ぎ立てねばならない事態に至るということだ(なお1998年の熊祭りではそういう卦は出なかった)。

No.11 寸劇「ネズミ」(「怖い」という演目の続きもの)(ルンガルトウブ)

演じ手が入って来て、「何をしてるんだね？」

見物人「獣踊りをしているんだ」

演じ手「なんで、おれのことを呼ばないの？」

見物人「それができるんなら、あんたもどうぞ」

演じ手「ああ、なんでも踊ろう」

見物人「だけど、おれたちはあれが怖いんだ」

演じ手「あんた達も狩をしたり、魚を捕ってるんだろ？おれなんか今しがたここへ来る道々何匹もの獣にあったよ。一匹をてんでこまいさせて引き裂き、別のやつをまっ二つに引き裂いて道路の両端に放り投げて来たよ」

見物人「あんたはあきれたやつだ」

演じ手「おれなんか、沢山の魚や獣を捕って来たんだよ」

見物人「あきれたね」

演じ手「リス、シマリスを見つけ、半裂きにして道のあちこちにほうりなげて来たんだ」

見物人「あきれたね、何んにも怖いものはないの？」

演じ手「そんなことはおれにはないさ、何んにも怖くないさ、あんたたちは何を怖がっているんだい？」

見物人「おれたちはあれが怖いんだ(と祭壇の熊を指差す)」

演じ手「あっはっは、あんなやつが怖いのか！おれなんか今しがたここへ来

る道で何匹も道の両側へ投げつけて来たんだよ、はっはっは、あんたがたは全くばかげているよ」

見物人「おれたちにはまだまだ怖いやつがいるんだ、アナグマに野生のトナカイだ」

演じ手「おれは今ここへ来る途中でまさにアナグマ、野生トナカイに出あって、次々と道の両端に投げつけて来たんだよ、はっはっは！何を怖がっているんだ！やつらはおれ達に容赦なんかする奴じゃないよ」

見物人「あそこにはアナグマが一杯いるんだ。やつらは人間に襲いかかるとっても悪い獣なんだ」

演じ手「おれはたった今、アナグマの二本脚をつかみ、道路端の樅の木やカラマツの木にぶっ叩いて来たよ、はっはっは、あんなやつを怖がっているのかい！」

見物人「おれたちにはまだ怖いものが一つあるんだ、ちっちゃなやつだ」

演じ手「そいつがなんかしでかすのかい？」

見物人「とってもいろんなことをするんだ、おれたちの着物を噛み切ったり……」

(演じ手の足元へ毛のかたまり(ネズミ)が寄せられると、彼はそれを見てとっても怖がり、叫び声をあげて逃げ出して行く)。

No.14 歌「キツネ」(ルンガルトゥブ)

仮面をかけた演じ手が登場する。

“自分用のキツネの罠をしかけることにしよう”。秋、野営地の傍の家の近くでキツネがよからぬことをするようになった。間もなくツァーリ(皇帝様)が貢物を集めにやって来るぞ(と彼は罠を仕掛ける)。翌日行ってみると罠にキツネがかかっている。彼はその後ろ脚を掴まえた。するとキツネは後ろ脚を残して先方へ逃げ去って行く。彼はキツネを追いかけて、再び追いつき前足を掴まえたが、前脚はもげてしまってキツネはさらに先方へと逃げて行く。彼はさらに追いかけ腹を掴んだが、その腹が千切れてまた逃げ去って行く。続いて首を掴まえたが、頭だけが逃げて去って行く。追いかけてその頭に追いつくと、イス(靈魂の一つ)だけがさらにまた逃げ去って行く。

ご見物の皆様、こんなわけで私にはつかまえることができませんでした。ま

ずは獣を捕まえて、それから、誰のためにとか何のためにとかを言うべきなんですね。

No.27 冗談の歌「狭い場所に座る」(ルンガルトゥブ)

演じ手が仮面をかけて登場する。彼は見物席に向かって、熊祭りを見物させてほしいと頼み、一同は彼を許す。

彼は歌う、(歌の文句)“私は人が満杯のこの家にやって来たが、私の座る場所を、狭くてもいいからほしいんだよね？その男達の間にあるよね”と、彼はそこへ座ろうとする。と、金切り声をあげてまた跳び上がる。(歌の文句)“キリが私に刺さった、ナイフが私に刺さった”。再び場所がないかと探して歌う。多分女達の間にあるのだと、座る。金切り声をあげてまた跳び上がる。(歌の文句)“トゲが私に突き刺さった、トゲが私に突き刺さった。”

続いて彼は若嫁達の傍に座り、脚をもたれかけてくれるようにと彼女らの方に向く(つまり若い女性を彼に近づかせるためである)。続いておばさん達(年輩の女性)の方に向きを変えるが、それは彼女達が彼から離れて脇の方に寄るよという意味である。ひと踊りして、出て行く。

No.37 寸劇「太鼓腹とせむし(僕)」(ルンガルトゥブ)

仮面をかけた二人が入って来る。一人は背にこぶ(瘤)があり、もう一人は大きな腹をしている。これは兄弟の二人である。一人はせむしで、始終働いており、もう一人は太鼓腹で、何もなくてただ盗みを働いているだけだ。兄の前者は魚の漁をして疲れてしまい、ちょっと眠入ってしまう。太鼓腹の者は、この隙に彼の魚を盗む。こんなことが何回かあった。しまいに兄は弟を待ち伏せして、彼の腹をたたいて言う、「お前の腹の贅肉をおとしてやるんだ」と。そして自分のボートに乗って漕ぎ去る。すると太鼓腹の弟は追いかけて兄に追いつき、彼のこぶを打ち始めて言う、「おれはお前の背中のこぶをおとしてやるんだ」と(この滑稽寸劇は必ず演ぜねばならないものとされ、熊の歌の一つとして歌われる)。

No.62 寸劇「こする」(ルンガルトゥブ)

エロチックな寸劇である。仮面をかけた二人が登場する。彼等の一人が歌う。(歌の文句)“こするやつ”持ってきた。これを使ってただ今から自分の、(歌の文句)“聖なる”踊りを披露しよう。演じ手は手に杖を持っているが、それ

は男根を模したものだ。彼は片方の手でそれを支え、もう一方の手でこすって見せる。

No.67 寸劇「ツァーリ(皇帝様)は何を話しているんだ？」(ルンガルトウブ)

仮面をかけた4人が登場する。ツァーリ(皇帝様)と彼の妻、それに宮務官の2人とである。ツァーリは自分の欲望を示す言葉“ペルマト”(翻訳不能)の一語を発するのみだ。一人の臣下がもう一人に尋ねる、「ツァーリは何をしゃべっているのでしょうかね？」と尋ねる。他方は黙っているが、「あんたは、ツァーリの言葉は解かるかいと言いたいんだろ？ツァーリは妻を自分の所へよこしてくれと言っているんだ」と言う。ツァーリはその言葉によって、妻の着物を脱がせ、ベットに横たわらせてほしいと言っているのだ。そしてツァーリの着ているものも脱がせ、妻の上に横たわらせ、激しく身体を揺り動かさせるようにと言っているのだと。

一踊りして、出て行く。

No.81 歌「女と商人」(ルンガルトウブ)

仮面をかけた演じ手が登場する。女として歌う。彼女が語るには、家を出て、スキーに乗り、オビの下流へと向かった。その時犬橇で行くオビのハンティ人が目に入った。彼女は、(歌の文句)“私を送ってよ”と叫んだ。でも彼は彼女に目もくれず先へと行ってしまった。続いて、トナカイの橇に乗って彼女を追いかけて来るネネツ人が目に入った。彼女はまた自分を送ってほしいと頼んだ。でも彼は彼女に追いついたが、脇を通り過ぎて行ってしまった。彼女は仕方なくスキーで先へと向かった。すると後ろから追いかけて来る男がいて、馬橇に乗っている。彼は彼女を自分の方にひたたくり、ポルノバットの村まで連れて行った。彼等は一緒に居酒屋に寄ってワインを飲んだ。接吻をした。彼は彼女に沢山の指輪をあげた。長靴もあげた。頭から足の先まで着飾らせてやった。彼女は言う、私は今しがた彼(ロシアの商人)と接吻を長々と行い、愛し合ってきたところだ。そして今、あなたがたの所へ立ち寄ったのだが、それは自分のこの喜びを分かち合いたいと思ってやって来たのだと。

次に、この項の最初のところで述べたように、寸劇などの冗談演目はベチョラ川から遠征して来た者達が演ずるということになっていて、毎夜演目の終了

とともに彼等は別の場所へと寝に帰る。その都度次のような歌を歌って去って行く。

No.40 歌「ペチョラ川から来た人達が寝に帰る」

（滑稽寸劇は、仮面をかけた者達によって演じられるが、彼等はペチョラからやって来た人々とされている。従来の伝統的なやり方では、登場して来た時に最初に彼等の歌があるのだが、今回の熊祭りではそれがなかった。毎夜予定された滑稽寸劇が終わると、この歌が歌われ、ペチョラからの連中は寝に帰る。仮面をかけたペチョラの者達以外にも仮面の精霊達も登場する。全ての滑稽寸劇は、ペチョラからの者達によって演じられ、それはルンガルトゥブと名付けられるが、字義通りに言えば、（歌の文句）“祭りにやって来た者達”と翻訳することが出来る）。

仮面をかけた二人が登場して場所に着く。先頭の者が歌う、（歌の文句）“我々はペチョラからやって来た者で、これから寝に帰るところだ。笑いと冗談の入った袋を持って出て行くんだ。我々は木の幹の空開いている所で眠るんだ。明日またやって来て、あなたがたを笑わせ、喜ばすつもりだ。祭の間、毎晩やって来てみんなと一緒に過ごすつもりだ”

(3) 踊り(精霊)

本年(2013年)9月にカズィム村を訪れた際、モルダノバ・タチアーナ・アレクサンドロブナと彼女の妹のオーリガが、我々を村はずれにあるハンティ人の墓地へ案内してくれた。それとともに、ハンティ人の霊魂観について説明してくれた。

霊魂の存在に対する彼等の意識は非常に強いものがあると思った。ひとつは、墓(土葬)の木棺の左脇(死者の頭は北向きなので、東側)に長さ20センチほどの角棒が栓のように差しあって、墓参りした親族はそれを抜いて、そして墓の上面をコンコンとたたいて来意を伝える。タチアーナはいかにもロシア風挨拶でその角棒に接吻もした。ハンティ人の死者の霊魂との交流は密接であると思った。また女性の霊魂は4つあり、男性はそれが5つとのこと。つまり、死者が生前訪ねまわった場所を巡回しているもの、また墓中に滞在しているもの(4、5年)、さらに死後人形に憑りついたもの(死後40日、50日間)、さらにま

た新たに生まれて来る赤ん坊に付くものである。そしてそれ以外に男にのみあるもので、いわば男の精力といったもの(その魂は死後猛禽類の鳥となり、誤ってそれが誰かによって殺されることがあると、その家に赤ちゃんが出来なくなるという)である。目に見えない霊魂が色々なところに憑りついているというわけだ。さらに熊祭りの演目中に、たびたび言及されているように、彼らの大地のあちこちの川、湖、沼、森などの各所にそれぞれの精霊に関わる聖地があって、そこを通る者はそれらに対して捧げものを供えて礼拝しなければならないのだ。

さればこそである。熊祭りの演目には多くの精霊がその場にやって来て、それぞれ祝福の踊りを披露する。第3日目からその数が多くなるが、最初の方には河川、湖沼、森などの最寄りの地域の精霊が出現し、第4日目の終末部には広域を管轄しているとか、人の生死や安寧を護っているとかがといった高位の抽象化された精霊(神霊)が集中的に登場する。以下にそれらを紹介する。

No.50 イングク・ベルト・イビ(ミシ・アル)

歌は精霊(女神)イングク・ベルト・イミ(水の神の娘)の名において演ぜられる。彼女は座して手で細工物をしながら歌う。外へ出てみた。オビ川の片側は低木に覆われており、その反対側は丘状に高くなっている。女神は水の中に住んでいる。彼女は聖なる父親の元へ出かけた。その折カラスが知らせを持って来た。おばあさんの所で、つまりカズィムの女神の所で今熊祭りが行われており、(歌の文句)“森の精霊達がみんなそこに集まっているよ、水の精霊達がみんなそこに集まっているよ”と、そこで彼女は父の家に入って行ってそのことを伝えた、(歌の文句)“私もそこへ行ってはだめでしょうか?”と。父親は次のように答えた、(歌の文句)“娘よ、お前はおばあさんの所へ手ぶらで出かけるつもりかい?”と(つまりカズィム女神の娘は、精霊エムボシ・イキの息子のエムボシ・アイ・ベルトに嫁いでいる。この息子がイングク・ベルト・イビの父親である、つまりカズィムの女神は彼女のおばあさんにあたるのだ)。父親は川の渦の深い所へ行ってチョウザメを捕えて来て歌う、(歌の文句)“娘よ、おばあさんの所へこれを持って行くがよい、そして家の中の熊が座している所にこのチョウザメをお供えしなさい、おばあさんの黒テンの膝元にこれをお供えしなさい(黒テンの膝元とはカズィムの大地の枕詞であり、ここの川の

精霊の聖なる姿の一つが黒テンなのである”。以降は彼女のことを、(歌の文句) “チョザメの早瀬の偉大なる女ナイ” と呼ぶ(ナイとは女性神のことである)。

No.52 マラヤ・ソシバ川上流の精霊(女神)の歌(ミシ・アル)

女神の名において歌われる。女神は自分の居場所について語る。マラヤ・ソシバ川の上流には大きな湖がある。その湖の岸にはケードル(西洋杉)の生えた丘がある。その丘の上に彼女の家があり、それは彼女の兄弟の森の精霊達が建てたものだ。兄弟達は毎日狩に行く。沢山の黒テンを捕獲し、夜、彼等は何かの手細工をし、カンナをかけている。これが毎日のことだ。女神の方は家に座して、(歌の文句) “黒テンの綿入れを縫い、黒テンの縫い目に糸を通して”、と。ある日彼女が外へ出てみると、(歌の文句) “私のおじさんの鉄のガガーラ(アビ)が湖で水浴びをしているのが聞こえて来る”(彼女のおじさんは鳥の姿をした精霊だ)。女神はおじさんは魚をとるために水浴びしていると思った。続いて彼女は兄弟達が神への捧げものを捕っている所へと行った。家にもどって来ると、(歌の文句) “家がまるで波の上のボートのように揺れているのが見える。窓の方へ寄ってみると、私の丘が家と一緒に地上に持ちあげられるのが見える”。鉄のガガーラが持ちあげたのだ。この鳥を測ってみると7サージェン(筆者註：約15m)の長さだ。女神が下方を見ると、彼等はすでに大ソシバ川の中流の上空にいる。(歌の文句) “私のおじさんが、ソシバ川中流の男が、鉄のシャベルを持って立ち、河床を掘っているのが見える”。さらに先へと私を運んで、すでにベジャコール村に至った。そこには別のおじさんのエム・ボシ・イキが立っている。アビは彼の上空を7回旋回する。支流バイト川の中流へと飛んで行くが、そこには三番目のおじのバイト・イキがいる。彼は家の仕事をしていて、私の兄弟達はそこに集合したのだ。私達はそこに降りた。私はそこに住むことにした(通常は歌がこのバリエーションで演ぜられれば、女神は踊らないのだが、歌い手は今回は踊ってしまった)。

No.77 歌「カズィムの女神はどのようにしてお客としてやって来たか」(ミシ・アル)

女神の名において歌う。女神は、自分はカズィム川の上流に住んでいて、娘がオビ川の方に嫁いでいると歌う。彼女は退屈で、娘の所に何かニュースがないかと、自分からそちらに向かったのだ。オビ川で彼女は、(歌の文句) “まさに偉大なる女神のカルタッシュ様” にお目にかかり、二人は抱き合い、交歓し

あった。女神はエム・ボシ・イキ(聖なる町で、この町の精霊の息子に彼女の娘が嫁いでいる)へ舟で向かったのだ。そこに丁度熊祭りが行われており、女神は娘と会った。接吻をし、抱き合った。女神は熊に敬意を表してから、雄ガモに変身してカズィムへとまた帰って行った(雄ガモはカズィムの女神の聖なる姿とされている。だからそれを殺したり、食べてはならない)。

No.82 歌「獵師が森の女神と会う」(ルンガルトゥブ)

二人が仮面をかけて登場する。彼等はハンティ人の獵師と森の女神である。獵師は森に行き、カラムツの丘の上に広がる小さな木立の方に立ち寄る。そこに森の精霊の家がある。家の中には女一人だけがいた。彼女は獵師に、彼女等の家の扉に先刻矢を射たねと歌う。やがて7人の兄弟達がここへもどって来て、獵師に血を流させ、彼の魂が身体から脱け出てしまうことになるだろうと言う。そしてもし生きていたいと望むならば、彼女の杖にしっかりとつかまっていなければならないこと、そうすれば自分の子供たちのいる我が家にもどれるだろうと言う。さらに、このカラムツの丘の上に7匹のトナカイを生贄として供えなさいと指図する。パンで作った7匹のトナカイの模型をお供えし、それらを打ち砕いて残して置く。

以上の諸演目は、いずれも精霊自らの意思でそれぞれの所在地から出現してやって来、そして踊ってみせるものだ(筆者註：もっともNo.82はミシ・アルという精霊の涙目ではなくて、熊祭りの場へ精霊がやって来るというストーリーのものとは違って、踊らないルンガルトゥブという仮面の寸劇の種目の中の、精霊の登場する演目である)。

続いて次のNo.86の演目によってで熊祭りの行われている家の中の場清めがなされる。それ以降は一連の偉大なる精霊高位の神とってというような存在達の登場となる。

No.86 雄と雌のカラスの歌(ルンガルトゥブ)

二人の演じ手が登場する。一人は女性の冬の服装をしている。彼女の帯は腿^{もも}の辺りで締められているので、愚か者に見える。他の者は毛皮の男の服装をしていて、彼も同じように普通ではない帯の締め方をしている。二人とも仮面をかけている。これはカラスの雌と雄である。雌は仮面の上方をスカーフで覆っ

ている。

カラス達は相手を互にけなし合い、奇妙な鼻をしているとか、曲がった脚をしているとか、背中にこぶが出ているとかと順次歌う。そして互にやきもちをやく。最後に雄カラスは、自分達は、エッチな話や猥褻な言葉遣い^{つか}を禁止するために登場して来たことを述べる。もしも、彼らが去った後に、参列者の誰かが嫌な言葉を発したら償いをしてもらわなければならないと言う。つまり、妻の母や姑達には、娘の夫とか姉妹の夫のためにキスイ(ロングブーツ)を縫わさせ、娘の夫とか姉妹の夫達には、妻の母とか姑のために、スカーフを買ってやらせるのだと。

そして踊ってから、退場する。

№88 精霊ホイマスに祈る歌(ボヤクティ・アル)

(ホイマスは“ネレスト〈筆者註：“魚の産卵”〉と翻訳されている)

特別の歌い手がボヤクティ・アル(祈り手の歌)を演ずる。もう一人が主人公の偉大なる精霊を演ずる。後者は、頭にキツネの毛皮の帽子を被っているが、後ろがたばねられている。たばねられた部分の先っぽには鈴が付けられていて、これはお下げ髪と見なされていて(昔ハンティ族の男はこんな風なお下げ髪をしていた)、それでもって悪霊を追い脅す。(歌の文句)“祈祷する男”は精霊に向かって、(歌の文句)“ホイマスよホイマス、魚のためにお下げ髪を精一杯に揺すってくれまいか”、と歌う。偉大なる精霊の演じ手は頭を揺すり振る。そのようにしてホイマスは魚を産み出すのだと信じられている。ホイマスは二本の矢を手にし、彼は座ったまま一本の矢を他方の矢にそえて動かす。これはホイマスが昼となく夜となく、また夏であろうと冬であろうと外出しないで、水の柱にカンナをかけて無数の削りかけを作り出しているのだ。もし夏であれば、細いカンナ屑を削り出して、(歌の文句)“小さなエラを持った無数の小魚を次々と泳ぎ出させている”、と。もしカンナ屑が大きければ、(歌の文句)“これは大きなエラを持った大きな魚を泳ぎ出させているんだ”、と。冬であればホイマスの手からリス、黒テン、トナカイやその他の獣達が産み出されるのだ。ホイマスは漁労が人々にとってどんなに必要なことなのかを述べ立てているのだ。

そして彼は踊りをして、参列者達を祝福するのだ。

No.89 精霊エム・ボシ・イキに祈る歌(ポヤクトイ・アル)

祈りの歌が祈禱者によって演じられ、もう一人が偉大なる精霊役で、黒いハラット(筆者註：ハラットとはゆるく長い上衣のこと)を着し、黒いキツネ毛の帽子を被っている。祈り手は精霊エム・ボシ・イキに向かい、家の中に目を凝らして、悪いもの(霊)がないかどうかを点検して言う。この精霊は、生の世界と死の世界の境い目を見守っているとみなされている。彼は人々を全ての悪いものから防いでいるのだ。祈り手は、(歌の文句)“偉大なる男がやって来るならば、大人達をがつつと喰い尽くす無数の悪霊、若者達をがつつと喰い尽くす無数の悪霊を脅し、床板から下へともぐり込ませるぞ”と。精霊エム・ボシ・イキの外見は熊であり、彼は今祭りが執り行われている熊に対して丁重に敬意を表する。祈り手は次のように歌う、(歌の文句)“偉大なる精霊が今森を駆け抜けてやって来た時、大きな牙のある姿(熊)をしていたので、森の精霊達はみんな恐れをなして逃げ去った”と。この精霊に呼びかける時には、(歌の文句)“我々のおじさん”と言う。祈り手は次のように歌う、(歌の文句)“我々のおじさん、偉大なる男よ、水域でのあちこちで傾けて来た頭を、あちこちの土地で傾けて来た頭を持ち上げ！水域のあちこちを踊りで湧き立たせ、大地のあちこちに踊りを立ちあげよ、悲しみにとってかわる踊りを、苦しみから守ってくれる聖なる踊りを、我々のおじさん、偉大なる男よ！我々のために残しおかれよ！残しおかれよ！”と。

精霊は7回まわり踊って、退場する。

No.90 精霊ヒン・イキに祈る歌(ポヤクトイ・アル)

歌い祈る男から演じ出されるが、もう一人の者が踊りを披露する(ヒン・イキは死と病気をつかさどる偉大なる精霊とされるが、しばしば彼は、氏族や居住地の個別の守護霊として現れる。例えばバンゼバット・イスント地区住民守護神である。ヒン・イキは、天の神トルムか、あるいは偉大なる女性神カルタツシの意向を受けて、人々の靈魂を連れ去って行く。つまり彼の役割は、人々の靈魂をこの世からあの世へと送りだすが、彼は単なる執行者で、指図しているのは別の神達である)。

祈り手が精霊に向かい、(歌の文句)“我々のおじさんヒン・イキよ、ここへ来てくださり、ここに巣くっている沢山の悪いものを皆追い出してください！”

私達の孫達を健康にしてください！疫病霊を取り去ってください！我々を長生きさせてくれるようお祈りします”と歌う。

祈り手は、参列者達にヒン・イキをこの場に登場させる許しを乞う。引き続いて精霊が入って来て、家の中の隅々を見渡す(偉大なる神々の凝視によって、全ての悪いものが四散し、滅亡すると見なされる)。ヒン・イキは人々の健康、長寿を壽ぎ、悪霊を防いでくれる聖なる踊りを披露する。

№.92 トルムの7人の息子に祈る歌(ボヤクトィ・アル)

祈りの歌い手が登場する。彼は天界のトルムの息子達が黒テンの膝元へ、すなわちカズィムの大地に降りて来るようにお願いする。(歌の文句)“低木の高い所に見に降りて来てください、高い木の中段まで降りて来てください”と歌う。引き続きトルムの息子達に、(歌の文句)“ツンドラの獣の仕たくの整い終えた家に、すなわち熊祭りの行われている家に降りて来てください”と頼む(天界の息子達は熊の靈魂の一つを天界に持ち去って行く)。またトルムの息子達に、太陽の方向から降りて来るように願う(太陽の方向は全てが善で、清潔で、神々しい。熊の靈魂がそのような天界へ赴けるように、全てが規定の通りになされねばならない)。(歌の文句)“彼らが降りて来るのが聞こえる、今入り口の部屋へ入って来るようだ”。踊り手がやって来た。彼は天界を象った四角形の杵を手にしていて、その杵には7個の十字架状の木片の飾りが打ちつけてある(この1998年の熊祭りでは木杵の保存状態がよくなく、いくつかの飾りが壊れていた)。踊り手は白いハラットを羽織り、天の創世神トルムを擬人化している。頭にはキツネ毛の帽子を被っていて、布切れで巻かれた木杵の中に頭をさし入れている。彼は7回旋回し、そのようにして熊の靈魂の一つを持ち去って行く。

№.95 精霊アストウイ・イキに祈る歌(ボヤクトィ・アル)

祈る者が登場する。彼は偉大なる精霊の所在地、枕詞、その役割を述べて、熊祭りの場に出現して来るように頼む。偉大なる精霊のしもべが聖なるトナカイを準備して、彼にトナカイの白い皮の、(歌の文句)“つま先がカモやホオジロガモの鼻のようになっている”長靴をはかせ、キツネ毛の帽子を被らせ、白い馬に乗せて連れて来るようにとうながす。祈り手は、すでに馬のひづめの音が聞こえ、扉を開けてくれと言っていると歌う。アストウイ・イキがやおら入っ

て来る。精霊は白いハラットを着し、片方の手には何も持っていない。彼は片手だけを振り回して踊るのだ。というも、この精霊の力があまりにも強すぎて、もし両手で踊ろうものならこの世の全てがぶっ壊されると見なされているからだ。彼の踊りの後、参列者は立ち上がって次々と大声で叫ばねばならない。そして太陽の巡る方向に何回かぐるりと廻る。

3. まれびと論を想う

先にこの熊祭りの芸能を、日本の能や狂言に近いものがあると述べたが、この熊祭りの芸能をたかだか日本の中世の頃、そんな程度の古さのものと考えているわけでは決してない。もっともっと古い時代の要素を持ち合わせているように感じている。日本の今日に伝えられている芸能のほとんどが、稲作伝来以降のものとして推されるのに対して、ハンティ人のそれは、農耕生活とは無縁な酷寒のタイガツンドラのシベリアの大地での、狩猟漁労採集生活を営む人々の中で生まれ今日に至っているものである。大雑把過ぎる比較ではあるが、仮に日本の考古学研究の視点を援用すれば、稲作の弥生時代以降のもの(日本のもの)と狩猟漁労採集生活の縄文時代以前のもの(ハンティ人のもの)、そんな差があると言えるかもしれない。時代が古いか新しいかはともかく、ハンティ人達の生活は、我々定住農耕民の日本人にはとても想像の出来ない狩猟漁業採集に依拠して来た。彼等はそれで生をつないで来たのだ。こんな話がある。20世紀初頭以来のソ連時代の定住化政策のもと、ハンティ人は大変な苦しみを味わったという。旧来のテント小屋(チュム)を帯しての森や川べりでの移動生活が禁じられて、ハンティ人による暴動が起り、悲劇的な事件が発生したとのこと。定住化が地についた感のあるロシア時代の今日、なお昔風の森の獣や鳥、川や湖沼の魚などに頼る生活が名残をとどめ継続しているように思われる。そういったことがしのばれた本年(2013年)のカズィム村調査行であった。生活の糧としてのトナカイ放牧依存率は確かに大きくなった。しかし、秋になると、病院や学校などの諸施設が完備されている定住地の村の家から、森の中の小屋へ移住する人々も結構いるとのことだった。こういった両親の二重生活のために、一人村に残された学童達が、学校のスタローバヤ(食堂)で食事をとっている姿が印象的であった。

ところで芸能の始源がいつかという設問には、考古学などとは違って、あらかじめ留保条件を考慮しておかなければならない。この設問は、どのようにして芸能が始まり、具体的にそれは何時のことかということであるが、超難問である。例えば、最初に儀礼的なことが行われ、それを繰り返しているうちに徐々に芸能に昇華して行ったといった説明文章をよく目にするが、その儀礼と芸能との境い目は、丁度タマネギの皮を剥ぐように、その正体が何時になったら現れるのか解らない話なのだと思う。またよく言われているように、芸能は常に現在に存在するものであるから、その始まりが古い過去のものであったとしても、現在に確認される以上のものではない。また始まりが古いもののだとしても、今日に至るまでの間には様々に変容をきたして来たものであって、現在のものに原初の姿を特定する術は見つけがたいものである。したがってシベリアのこの熊祭りが古そうだと言ってみても、厳密にそれがいつの時代のものであるかを特定する手立てが見つからないと言うのが正直なところだ。

ところで話が変わるが、周知のように芸能史研究の提唱者の折口信夫が、かつて「芸能史六講」(講演の速記録)の一節で次のように述べていた。

かのまつりに遠い所から神様が出ておいでになる。更にいへば、ある晩を期し、いつも必、ある大きな家へ遠来の神が、姿を表わされる、といふことになりますが、其際、澤山の伴神を連れての来臨の場合が多いのです。そこで家の主人が、その来臨せられた神達を饗應することになりますが、その主となる神がまればとなのです。…… 中略 ……

そして饗宴が行はれる訳ですが、やがて神が立って、めいへ定まつただけの儀式的な舞踊のようなものを行はせます。と同時に、この時に歌謡なり或は詞章を唱へるといふことも、あつたに違ひない。我が國の後世の宴会には、この形がよく残ってゐます。この来臨の神の行動と共に、主人側から舞をまひ、謡ふものが出て来るといふ順序になつてをります。

要約すれば、祭の時に遠方からまればとが来臨し、饗宴が催されて、まればと側が歌や踊を出し、主人側からもそれらを出した。つまり芸能は、その祭りの饗宴の折のこのようなやりとりに始まったという説明である。上記引用文は

折口の講義の速記録をもとにしてまとめられたという。そこで折口自筆の「國文學の發生（第三稿）“まれびとの意義”」によれば、このまれびとは、海の彼方の常世とこよの国から來臨する農耕の豊穰に関わる神であり、ことに沖繩のマウンガナシ、アカマタ、クロマタなどの行事傳承から想い描かれた神靈的なものである。したがってこのことからすると、シベリアの熊祭りの芸能にこのテーゼをあてはめようとする、いかにもかけ離れた事例ということになってしまう。つまり熊祭りの場合、主体となる熊は海の彼方ではなくて森からやって来るものであり、農耕ではなくて狩猟漁労採集生活に関わるものだからである。

確かに折口は、熊祭りのこの芸能を一切知らなかったはずである。ところが、実は逆に折口のテーゼを熊祭りの方に引き寄せ得る事例もなくはないようなのである。金田一京助がアイヌの熊祭りについて次のように記していた²。

所謂「熊祭」といふ有名な、やかましい行事も…中略…熊の赤児を養ひ育て、十分大きくなつた時に、「さあ、もう天の両親が待つているだらうから、御帰りなさい」と送る行事にほかならない。だから熊祭は原語ではカムイオマンテカムイオマンテイオマンテイオマンテマラプトイベマラプトイベ熊送り又は神送りと呼ぶ。熊祭の御馳走を珍客振舞といひ、マラプトは邦語稀人即ちまらうどの古形の変じた語で、獲られた熊は、訪づれる神であるといふ考からの名である。尤もこれは、古い日本の信仰のアイヌに入つて古形を存してゐる一つの例である。

つまり、熊祭りの御馳走のことをマラプトイベと称しており、この祭りの熊をまれびとと判断できるというのである。確かにこれが熊祭りの饗宴の場で行われること、まれびとが稀にやって来る存在であるといった点は類似しているが、熊は動物であり、それを神様扱いしていいのかという問題、森の王などと言われる熊、海の彼方からやって来る存在（常世の神）と見なせるのかという問題などをクリアせねばならない。

ところで、折口の説明では、まれびとの神格、靈性はほとんど明確に説明されていない。他方、西シベリアのオビ川のハンティ族の方は、本稿第2節で紹介した熊祭りの芸能演目から解るように、熊のような動物靈、川・湖沼・森や氏族などの守護靈、広大な地域の人間生活の幸、不幸や安寧を司る偉大なる精靈、天界の創世神といった異なるレベルのさまざまな靈が存在している。したがって両者を比較してどうのこうのと言う問題ではなくて、折口のまれびとの

実体を明確化する際の具体的な参考事例の一つが、彼の地に、その鏡のように存在しているものと考えられるのではなからうか。実は、その参考となるものに、モルダノフ・チモフェイ・アレクセイビッチが作成した次のような、これら各レベルの靈的存在を一括して図示した世界図がある。



この絵図を説明すると、輪切りにした空白の最下層の弧が死者世界(地下界)であり、その上の弧が地上世界で、人、動植物、家・村がある。その上の弧がそれらの守護靈の世界である。さらに上の弧が、人間生活や広がりのある一定地域の幸、不幸や安寧を司る偉大なる精靈達の世界。そして最上層の弧が天界の創世神トルムの世界である。彼の論文に説明してあるのだが、

これら異なるレベルの諸精靈は相互に関連し合っている。例えば熊祭りにおいて中心的な存在である地上世界の熊は、祭り後に氏族の守護靈となり、また地域や人間生活の安寧、幸、不幸を司る偉大なる精靈にもつながっている(No.89参照)。さらに天界の創世神とも密接に関わっている(No.4、No.92参照)。このことからすると、靈性が莫とした折口のまればとの中身とは、あるいはこういったモデルを例に錯綜したレベルの異なる靈的存在間の中で検討できないものであろう。絵図レベルの異なる諸靈の間には年代差があって、それぞれが上記の順に、展開発展した歴史的変遷があったとも読みとれ、まればとと解明に参考となるように思われる。

次にまればとがどこから出現して来るかの問題だが、折口の言った海の彼方のニライカナイとは、東の方角であつたらしい。「さうして其所在地は、東方の海上に観じて居たらしく見える」と琉球王朝の考え方を披露していたが、熊祭りにおいては、アイヌでも西シベリアでも東の方角から熊が去来するとしているのである。この点も同じように考えられるのだ。

もうひとつまればとに随伴してくる伴神のところであるが、それを当該西シベリアの熊祭りにあてはめると、熊以外の諸精靈と見なせるのではなからうか。他方、滑稽す劇などの冗談話(ルンガルトゥブ)を演ずるペチョラからやって来る者達は、折口がおとずれ人(まればと)の後世における変遷した姿として示し



た、次の図の祝言職⁵—乞食のあたりの存在に相当するのではな
 なかろうかと思われる。

また彼等は、当該饗宴の主人側(あるじもうけをする側)の出
 し物を演ずる者達に相当するといえるのかもしれない。

ともあれ、折口信夫がこの西シベリアの熊祭りを見ていたら
 一体何と述べたことであろうか？

注

1. 『折口信夫全集』第18巻 1967 中央公論社 p344
2. 『アイヌ叙事詩 ユーカラ』1994 岩波書店 p16
3. チモフエイ モルダノフ 『北部ハンテイ族の熊祭りの歌における世界図』
 (1999、トムスク大学出版所) p68

ТИМОФЕЙ Молданов: КАРТИНА МИРА В ПЕСНОПЕНИЯХ МЕДВЕЖИХ И
 ГРИЩ СЕВЕРНЫХ ХАНТОВ (Издательство Томского университета 1999)

4. 『折口信夫全集 第1巻』1965 中央公論社 p22
5. 前掲注4書 p15

(ほしの ひろし)